



リアルドリームドラえもんプロジェクト

第1弾

ドラえもん・ザ・ロボット誕生!

もりやま かずみち
森山和道(サイエンスライター)

「ぼくドラえもんです。」見た瞬間、そんな言葉が浮かんできた。そのくらい、僕らが知っている「あのドラえもん」のイメージに近い。バンダイが「リアルドリームドラえもんプロジェクト(RDDP)」の第一弾商品として3月に発売する「ドラえもん・ザ・ロボット」は2万円弱という価格ながら、よくできている。イメージの中のドラえもんそのままの形で、大山のぶ代の声が聞こえてくると、「あ、ドラえもんだ!」と思ってしまう自分がいた。

ボディの頭頂部には光センサを持ち、なでなでしたり叩いたりすると「僕も君をなでてあげたい」とか「この～やったな～」とおしゃべりする。しゃべるときには口の上に仕込まれたLEDで口が赤く光る。光の強度は音量に応じて変わる。約750語を話すことができるという。時計機能があるので、時刻を聞くと教えてくれる。スピーカーとマイクは口についている。鼻は赤外線を使った障害物センサだ。

首輪は赤外線受光センサが仕込まれており、ドラヤキ型リモコンからの信号を受光する。リモコン通信距離は約2mで、ドラえもんを操縦できる。ボタンを押すと「いい匂いがするぞ」と、ドラヤキ型リモコンに近づいてくる機能もある。「ドラヤキフェロモン」と呼んでいるようだ。鈴は発光し、会話サイン

機能を持っている。

ポケットは音声認識で開閉する小物入れ金庫になっている。子供の頃、ちょっとしたものが宝物だったことを思い出した。

足や腕は自由には動かないが、腕は左右垂直回転程度、足そのものは上下可動して足踏みしているように見せることはできる。走行は車輪だ。前後左右・旋回できる。

転倒しても自力で起きあがることはできないが、傾斜センサで自分が倒れていることを感知すると「助けて～起こして～」 「苦しい～」などと音声で助けを求める。

手とシッポがスイッチになっているところもにくい演出だ。ドラえもんのシッポが緊急停止になっていることは、マンガを読んだことがある人なら誰でも知っている。

全体に「ドラえもんならこうだろう」とあるいは「ドラえもんならこうじゃないだろう」といった設計思想で作られていることが見てとれる。

こだわりはドラえもんの外装の質感にも現れている。以前発表されたときにはつやつやした素材だったが、今回発売されるモデルでは、フロッキー加工が施されており、暖かい感じがする。見た目の重要性をつくづく実感できる。

「最初はプラスチックを考えていたんです。でもね、ドラえもんって、ロボットなんてだけ

ど、やわらかそうな感じがするじゃないですか。でもジャイアンとぶつかったりするとドラえもんの頭はカチカチだったっていうシーンがあったりして結構悩んだんですけどね」と、バンダイの愛・エンターロボチームの大江雅之サブリーダーも語る。

バンダイがドラえもんロボットを発表したのは2002年5月のおもちゃショーのときだ。だがそのときのモデルから一度全部再検討しなおして、現在のモデルへ至ったという。もともとは、ドラえもんと会話する、というコンセプトだったが、現在の音声認識機能では、会話という行為を楽しませるロボットを作ることはなかなか難しい。

「プロトタイプにはドラえもんが悩みを聞いてくれるっていう機能があったんですが、実際にやってみると、いまいちピンと来なかった。会話って単に声のやりとりだけじゃないですよ。でも今の技術だと、言葉のキャッチボールさえ難しい。すると非常にストレスになるんですよ。じゃあどうしようかと。自然な会話にするのではなく、会話に目的を持たせることでストレスをなくしていこうというコンセプトに変えました。」

つまり、音声をコマンドとして使う方向に変えたのである。また、全体のコンセプトも変えた。

「会話じゃなくて、ボディ全体を使った対



今回お話を伺った 株バンダイ 新規事業室 愛・エンターロボチームの大江雅之サブリーダー



4次元ポケットは音声認識で開閉する小物入れ金庫になっている



手がスイッチになっており、音声登録の際などに使用する